

ことばはどこで育つか

藤永 保 / 2001 大修館
Tamotsu Fujinaga / 2001

土居 香央理 DOI, Kaori

● 国際基督教大学教育研究所
ICU Institute for Educational Research and Service

「ことばはどこで育つか？」この素朴な疑問に答える形をとりながら、本書では 300 ページあまりを充てて言語獲得における生得説と環境説を再吟味している。言語獲得に限らず、人の発達における生得性（あるいは遺伝）と環境の影響を扱った研究は多い。しかし、特に言語発達にあっては、チョムスキーの生成文法の提唱以来、生得説の立場が殊のほか強くなっているのも事実である。本書では、事例研究という手法を用いて、多分に生得説に流れがちな言語発達研究に一石を投じ、発達環境の持つ豊かな可能性に言及している。

以下、簡単に本書の構成を説明する。第 1 章では言語の生得性について種特異性の観点から述べている。類人猿やオウム、イルカ等との比較から、ヒト科に見ることばの種特異性を統辞法の有無に関して検証している。第 2 章では不全失語の例などを挙げながら遺伝性に注目して言語の生得性を論じている。ここまでのことばを取り上げた前半部分である。一転して後半部分では、「野生児」に見る養育放棄の事例やヘレン・ケラーの幼児期の記録などから、言語発達における環境の影響について取り上げ、第 3 章では言語獲得の臨界期の問題を、第 4 章では言語獲得における学習要因を論じている。ここで重要なのは、環境の貧困から不十分な言語発達を遂げた子どもであっても、愛着関係に裏打ちされた

環境を与えてやる等の条件が整えば、再び言語習熟能力が伸び始めることが示唆されている点であろう。すなわち、言語発達は単一の言語発達プログラムの解発としてではなく、複数の経路を通って行われると考えることが望ましいと結論づけられている。

これらを含め、本書の第一の特長として挙げられるのは、数量的なデータではなく、事例研究によって言語の生得性を検討した点にある。プロローグで言及されている通り、稀有な例を丁寧に読み解くことで、言語発達研究の主流ともいえる強固な生得説によって環境説の立場が不当に狭められていることを指摘し、環境の持つ可能性に目を向けさせることに成功しているのではないだろうか。

そして本書の第二の特長として挙げられるのは、あとがきで著者自身が述べているように、初学者から大学院生まで、様々な興味と知識のレベルに応じて読むことのできる本であるという点である。初学者であれば、平易な語り口で伝えられ、人からオウム、野生児からヘレン・ケラーにまで渡る幅広い事例に必ずや興味を抱くであろう。大学院レベルの読者は、自分の知識と照らしながら言語獲得の諸側面を概観することができる。その意味で、本書は様々な事例から言語発達には複数の経路がありうることを明らかにする良質な解説書であり、研究書であるといえる。